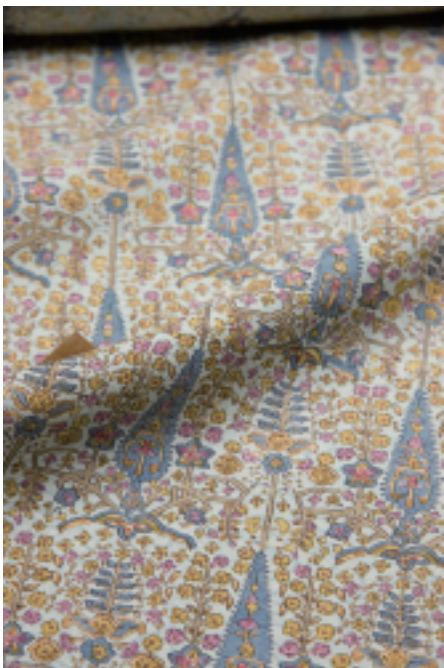


大創業祭特別企画

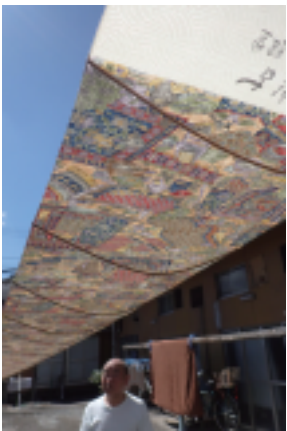
三代目更勝 (さらかつ)



戦後、絹地に更紗を施すという現代の江戸更紗の基礎をつくった更勝三代目青木新太郎。その名人といわれた父から引き継いだ技を伝承した四代目青木章三。伝統の技に、モダンな現代にマッチした色合いに変化させています。三代目更勝の更紗、是非ともご覧下さい。

四代目 青木章三

三代目更勝を切り盛りするのは四代目の青木章三さん。まさに、江戸っ子という言葉がぴったりのお父さんです。三代目が『三代目更勝』で商標登録をしたため、四代目の現在でも三代目更勝という名前で商品を作られています。初めてお会いしたときは職人気質の怖そうな雰囲気でしたが、話していくうちに時折見せる笑顔がなんともチャーミングな青木さんは現在70歳。跡取りがいなかったため青木さんが辞めてしまえば、日本の更紗の源流ともいべき更勝の更紗は手に入らなくなってしまうます。



『あと5年だけで』

重くのしかかる青木さんの言葉。日本中の手仕事がそうであるように、名工の作が消えようとしている現代の日本。少しでも多くの作品を残していただきたいです。



伝統の長板染め

更勝工房ではシルクスクリーンを使わず、6メートルもみの木の長板の両面に生地を貼り付け、型紙で染めていく昔ながらの方法を守っています。長板の折り返し部分は剣の先のようになっていて、折り返しの部分をいかにわからないよう染めるのが難しいそうです。



型染め

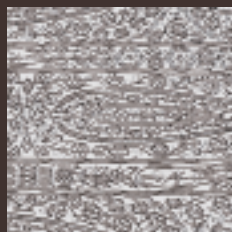
輪郭だけでも5枚以上、最終的には30〜40枚の型紙を使つ気の遠くなるような作業



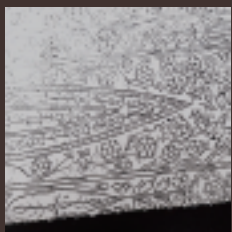
1枚目



2枚目



3枚目



4枚目



5枚目

1型につき40〜50回繰り返し染めていきます。その際、星と呼ばれる点を目印にして、型のつなぎ目がわからないように染めていくのが職人技。30枚型を使う場合、合計1500回近く同じ作業を繰り返しませす。更紗の場合すべての色を型を使って染めていくので、気の遠くなるような作業工程です。